審議会等議事概要

平成24年度　第４回　滝川市都市再生整備計画事後評価会議　議事概要

日　　時	平成25年２月７日（木曜日）午後４時00分～午後６時30分
開催場所	滝川市役所５階　第２応接室
出 席 者	委　　員：小篠委員長、続木委員、田端委員 事 務 局：浦川課長、加地副主幹、青木主査、後呂主査
議　　事	**１　開　　会** **２　審議事項等** **（１）　中心市街地活性化における課題と方向性について［資料１］** **【委員長】** ▼国交省の事後評価については完結し、これからは本質的な中身について、少し深い議論になると思うので、よろしくお願いしたい。 **【事務局】** ▼中心市街地活性化基本計画（都市再生整備計画）の実施過程についておさらい。 **課題**（①都市福利施設の充実、街なか居住の減少／②コミュニティ活動の充実／③中心市街地の集客力の衰退、回遊・滞留機能の欠如） ↓ **方針**（①住みよい生活ステージ形成／②商店街協働コミュニティ形成／③回遊・滞留ルート形成） ↓ **目標**（①機能集積・街なか居住推進／②市民活動の活性化／③賑わい創出） ↓ **指標**（①街なか居住人口／②コミュニティ施設等利用者数／③歩行者、自転車の通行量、空き店舗数、図書館利用者数） ↓ **事業**（①機能集積、街なか居住推進／②市民活動形成事業・商店街協働事業／③賑わい創出事業、賑わい創出のための施設運営事業） ▼新たな課題に対する要因と方向性について説明 当該計画の実施により新たな課題（認識／実感のズレ）が発生。その要因として、商機能が抱える問題が影響している。 **①商業者意識の不足** 活性化・賑わいに対する目標（目的）意識が希薄である。 ⇒目標があいまい（共有できていない） ⇒計画が関係者に浸透されていない。 **②関係機関等との連携不足** 活性化に向けた各主体及び住まい手との連携が不足している。 ⇒事業への進め方（計画→実施）があいまい。 ⇒参画への仕組があいまい。

③商機能の衰退

▽遊歩客が不足している（日本のまちの類型：人口10万人以下では、最寄品の需要に応える商機能しか期待できない。／消費者行動の変化）。

▽土地（未利用地）問題（２核の停滞、その他空き店舗・空き地の増加）

▼今後の方向性について説明

方向性Ａ：中心市街地の華は商機能であることから、商店街を活性化させ、個店を繁盛店に転換させるために、「魅力ある買い物の場」を再構築し、居住・用務・業務客相を遊歩客相に変身させる。

方向性Ｂ：商業はあくまで中心市街地の一機能として位置付け、居住客相・用務客相・業務客相に特化させた新たな中心市街地活性化を模索する。

方向性Ｃ：文化施設、医療モール、ファーマーズマーケット、飲食店とのコラボ、モノづくりなど、別視点（別分野）からの中心市街地活性化を模索する。

いずれにおいても、オリジナリティ、各機能の設定・役割分担、目標の設定・共有化、連携した取組が必要不可欠である。

（２） 意見交換

【委員長】

▼本日、旧市街地図を用意したのは、中心市街地がどういうふうに変遷してきているか、中心市街地を特徴づけていたものは何か、地図上からもう一度確かめたい。

	市街略図
S25	▽商店街の位置及び国道沿いに商店が立ち並んでいる。⇒国道ﾒｲﾝ
	▽五十嵐商店が大きい。
	▽拓銀が当時からこの位置
	▽役場が現在の駐車場位置に配置
	▽郵便局が病院よりも大きい。
	▽飲み屋街は駅前に位置
	▽滝川西高が第一小学校に隣接
S33	▽現在のスマイルビル付近の区画は、昭和33年の市街地図では商機能が集積し、非常に密度が高い。
	▽地図範囲の広がりから、市街地が拡大されてきた様子が伺える。
総体	▽鉄道よりも国道が基軸
	▽神社祭典も12号線沿い（露店は歩道上）
	▽鉄道はなぜ離れた場所に敷設されたのか？ ⇒現在の煉屋付近に駅を建てる構想もあったが、坂を上るには速度が足りず、その分距離を必要としたので、現在の位置になった。
	▽駅と中心市街地を引き寄せるのは昔から課題だったと思われる。
	▽駅から左側はまったく商業地ではなく、完全に右側寄り。また、ここまで駅裏がないのは非常に珍しい。
	▽駅前地区は現在とは街区が異なり、再開発の際に区画整理から線形まで変えている。

	【委員長】 ▼遊歩客の減少要因として、郊外型大型店の出店により、商業の購買層が取られ、中心市街地は衰退したという視点になっているが、中心市街地とは、いわゆるスーパー的なお店が扱っているものだけを売っていた訳ではなく、もっと違う魅力として、違うﾓﾉを販売したり、情報を発信したりしていなかったか。 【委員】 ▼売るものが重複している訳ではなく、買回り品の一部が大型店に移行したに過ぎない。実際、平成８年の商店街図にはこれだけ様々な職種が並んでいた。 【事務局】 ▼昔はﾍﾞﾙﾛｰﾄﾞに畳屋さんなど日用雑貨を販売する小売店というよりは、ﾓﾉづくり的な職種が多かったように思える。実際日用品を売る店は少なかったのか？ 【委員】 ▼栄町には集積していたと思われる。それこそ、工業も含めていろんな職種がコンパクトに集積していた。 【委員長】 ▼ロジックとして幻惑されているのかもしれない。大型店が中心市街地の全部を吸い取っていった訳ではないと思う。滝川の中心市街地はもっと違う役割とかいろんなものを担っていたはず。 ▼その吸い取っていったものを全部取り戻そうとして中活計画や都市再生整備計画がつくられていたのではないか。ただ一方で、図書館、コミュニティ機能、高齢者用の住居施設などを立地させるということは、実は今のロジックに合致した事業だと思う。 ▼しかし、一気通貫に話をしている人はいなくて、あれは一つ一つのプロジェクトの玉だというふうになっているとの理解にしかなっていないのではないか。 【委員】 ▼商店街の中でも大型店の出店を言い訳にしている人は多いが、決してそういう訳ではない。 【事務局】 ▼前回、活性化に対する共通のロジックがなく、活性化のイメージがあいまいとの話があったが、同時に賑わいとは何かという疑問もある。 ▼確かに大型店に傾いた人達を街なかに取り戻すことができれば、活性化なんだというイメージの中で組み立てられていると思う。やはり共存共栄的に郊外に頼るものは郊外に頼り、違うものは既存の商店街に委譲していくことが必要なのかもしれない。これが実感が湧かない部分だと思う節もある。 ▼郊外から引き戻そうとしたけども、結局賑わいに繋がっていない。一方で、いろんなものを整理し計画を実施してきたが、実際にうまく戻る訳でもなく、結果実感に至っていない。 【委員長】 ▼極論から言うと、目標ｲﾒｰｼﾞの設定が完全にｽﾞﾚているのではないか。 【委員】 ▼自分は大型店と共存共栄できると思っている。目的が違う。だから、旧市街地でいいと思う。大型店では満足できない人への受け皿的な商店街を明確に出していかないと、「大型店が進出してきたから、景気が悪いから、世の中が悪いから」と言っているようでは、全然前に進まない。

	【委員長】 ▼古い地図を見たのは、集積されている所がないかを確認するため。しかし、昔の集積がきっちり定着されている部分があまりなく、非常に残念である。 ▼例えば、ヨーロッパに行くと、中心市街地の中に旧市街地と新市街地が必ずある。なぜ、高層ビルが立ち並ぶ新市街地がある一方で、旧市街地が生き残っているのか。そこには、市役所など公共施設を残し、周りを広場や商業施設の集積がある。新市街地には、鉄道駅をずらし、交通ターミナルをつくり、その周辺を再開発によりオフィスとショッピングモールの複合ビルが建てられている。つまり、明確に共存共栄している。 ▼新市街地で買えるものはどこでも買えるが、ここでしか買えなかったり、味わえなかったりするものは、旧市街地にしかない。結局、今まで自分たちがやってきたものについて自信を持って守ればいい。 【委員】 ▼100あるものを100、中心市街地に取戻し過去に戻そうとすることは虫が良すぎるし、この時代では無理だから、自分の身の丈を考えれば、100のうち１取れれば社員も養える。 ▼逆に大型店とコラボできないか。それにより100を200にできれば、個店は１を２に、大型店は198を取れる。そういった逆提案ができれば、滝川の特色が出せる気がする。ただ、この思いが中心市街地のお店にどれだけ合うのか、仲間づくりの部分で自信はないが。 【委員長】 ▼今話されたように、取られたものを取り返すのが使命といった既成概念により取り組んでいるから目標意識がなかったり、イメージや実感がズレたりすると思う。そこの呪縛をまず解かないと話はスタートできないだろう。それが解ければ、取り組む者も現れるかもしれない。 【事務局】 ▼都市計画上、郊外にこれ以上出店できないよう規制し、大型店は街なかへシフトしている。あとは郊外店が抜け出ていくことにより代替わりすることもあるかもしれないが、今後は街なか街なかへということで、どのような焼き直しになるのか。その中で３・３地区や駅前地区のような物件をどう焼き直しするかがこれからのテーマだと思う。 ▼あとは旧市街地にいる人がこれ以上取られるものはないということになるのか、そもそも取られたとか取られてないとかという話でないというところを気づいてもらえるかどうか。 【委員長】 ▼都市計画というと、どうしても経済効果を優先させなければ都市開発ができないという状態にあるので、一番効率的な都市開発をするための投資はどこにあるのか、どうしても注目される。そのため、購買力をきちっとキープできるような内容構成にした店舗で、床面積当たりの売上が目標値を達成できるような企業に対し、誘導をしかけるといった施策を打つ訳である。これにより商業としての相乗効果を狙うのだが、結局その企業が全部吸い取ってしまうような構図になっている。 ▼都市計画的には用途規制だとか、都市計画地域と農地の境界をきっちり明確にするといった形の中で出店できなくするということは、集約型の都市構造を狙う意味で今の実態に即していると思うが、一方で、街なかのことを考えようとしたときに、それが回帰することでまた問題となる。

	【委員長】 ▼例えば、大型店が３・３地区に出店することになれば、そこが全部搾取することになり、周りは打撃を受ける。よって、そこにはもう一つ知恵が必要で、都市計画的な誘導とは少し異なるような形で、地元に対しての経済振興をどう図るかという視点（ソフトとハードの計画）がそこに被さってこないと、厳しい可能性がある。よって、コラボできるとして、商店街が仕掛けないと絶対に厳しい。 ▼地元商店街は大型店が出店したことにより、相乗効果でうちの店も流行るんだというふうに思うか、いやいや全部吸い取られて終わりなんだと思うか。今までは郊外だったけど、今度は身近にそこにあることをどう捉えるかという部分は、確かにありうる。 【事務局】 ▼単純にそこに解体を推進するということは、ある意味街を壊すことに加担している可能性が高いということか・・・。 ▼既存商店街の方がどう仕掛けていくかという部分をソフト事業として出てこないと厳しい。 【委員長】 ▼丸亀がやっているように、既存商店街が立ち上がって、まちづくり会社を興して、民間スキームにより土地を一部抑え、そこでどういったお店の募集をかけるといったやり方で動けば・・・というか動かないと、個店は飲まれてしまう。だから、札幌のコンサルからは、ビジョンがない中では解体支援を行ってはいけないということになる。 【事務局】 ▼素人的な考えからいくと、３・３地区が焼き直しされ、お店が出店されれば、そこにまた相乗効果が生まれ、空き店舗が埋まっていくのではないか。また、坪単価の跳ね返りが高いのであれば行政として支援し、新しいものに焼き直すことで、何か起爆剤になるのではないかと思い描いていた。 ▼札幌のコンサルからは、「相乗効果を生むとの計算式が理解できない。そこにしっかりしたソフトがないとダメ。ただ単にそこが流行るだけで、他のところは衰退する。」と明確に言われた。 【委員長】 ▼出店しようとする店舗が大型店であれば、すごくｷﾞﾘｷﾞﾘのところでどういう儲けを出すかということを視点に実施しているので、その計算式が崩れては商売にはならず、ﾌﾟﾗｽαの余裕でこの地域に支援しようと考える企業は絶対ない。 ▼その地域に支援したことが自分たちに返ってくる図式があればやるが、それがない。一方通行である。そんな余裕は彼らにない。大きな商売をしているようだが、利益率は変わっていない。 ▼なぜダメかというところが見えてきた。 【事務局】 ▼３・３地区の一等地に公営住宅を建設し、人が住んでもらうことも政策としてはありえるのかもしれない。ただ、それで家賃収入が入るのかという議論はあるのかもしれない。 【委員長】 ▼駅前にある公営住宅建設も非常に正解だったと思う。

	【事務局】 ▼あれも一棟なので、効果性に不安もある。 【委員長】 ▼その辺の政策を骨太にしていくことが意味を持つのではないか。 【委員】 ▼サービス付高齢者住宅などは進めるのではないか。 【委員長】 ▼サ高住はどこでも進められ勢いがついているし、勢いつかざるをえない。それでないと増えていく高齢者の入居先が確保できない。 【事務局】 ▼そこに問題を抱えており、結果的にどんどん建てることにより、旧産炭地域から高齢者が増え良かったと思いきや、介護保険料に跳ね返る可能性も否定できない。 【委員長】 ▼高齢者一辺倒で、かつ、サ高住だけではその図式になるので、もう少し街なかに子育て世代の居住者も含めて誘導していくような施策、居住者のミックスがあってもいいのではないか。 【事務局】 ▼今滝川市としては、郊外に住む高齢者世代が街なかのサ高住等に入居し、そこで空いた郊外の一軒家等には、子育て世代が安く入れるようなイメージを建設部で描いている。これについては議会でも質疑が出ている。 【委員長】 ▼ストック活用という意味ではいいかもしれない。でも、あまり効果はないかもしれない。中心市街地に対する居住部分をもっと強力に推進して欲しい。 ▼実態として、子どもを育てるにはいいかもしれないが、今の若い子育て世代が郊外の住宅で本当に生活を楽しめるのかどうか、ライフスタイルに合致しているのかどうかは結構微妙。街なかの楽しみを享受したいと思う人はむしろ増えており、結局子どもを預かってもらい自分のやりたいことをやろうとするニーズは増えている。 ▼介護保険が増えるということはあるのかもしれないが、一方で子育てに対する社会サービス費用の増大という部分も動く。その分量が高齢者の割合からすると小さいから、高齢者に対する介護保険料がクローズアップされるのかもしれないが、どちらに転んでも社会サービスを税金として負担しなければいけない部分は増大する傾向にある。 ▼そうすると、うまくいくかは分からないが、例えば、高齢者が子どもたちの面倒を見てくれるような雰囲気を街なかに生ませることができれば、市の負担が軽減されることも起こりうる。実際、昔の街はそうだったので、世代間ミックスをした住宅政策を打ってはどうか。 ▼なお、都市計画の中の住宅政策という形で切り取られる枠組だけではなく、中心市街地の今後を担う方向性にもラッピングしてくる。

	【事務局】 ▼３、４年前の道新だと思うが、まったく血縁関係のない年寄と、若い世帯が一緒になる公営住宅がどこかであったはず。そこでは共働き世代の子どもを預かる公共的スペースがあり、高齢者が面倒をみている。 【委員長】 ▼巡回型で保育士や子育て支援のケースワーカーなどがたまに巡回することであればトラブルもあまりないかもしれない。 【事務局】 ▼田舎になればなるほど顔見知りということもあるが、都会ではなかなか厳しい部分もあると思う。 【委員長】 ▼今若者の間でシェアハウスの動きが盛んだが、あれは友達でもなんでもない人が同じ屋根の下に暮らすというところから始まる。しかし、結婚などした場合はそこから出ていくので、そのうち、シェアハウスはシングルだけでなく、いろんな人が住ように変わるのではないか。高齢者でも単身でお金を持っていない人もいるし、若者もお金がない。また、結婚してもそんなにお金がない人など状況が似ている世代がシェアすることもありえ、かなり現実的である。 ▼北欧発祥でコレクティブハウスというシステムがある。コレクティブハウスとは、独身も老人も子育て世代もおり、雑居状態になっている集合住宅である。そこでは、皆がお互いに助け合うようなまとまりで、一番は食事当番。毎日だと大変なので、１か月に１回ぐらいで回ってくるローテーションになっているが、働いている人でどうしてもできない場合は、それ相応のお金を出す。 【事務局】 ▼障がい者の中でｸﾞﾙｰﾌﾟﾎｰﾑがあるが、あれはﾌﾟﾗｲﾍﾞｰﾄと食事する共同部分がある。しかし、かなり費用がかかるので、それなりの資産が必要となり厳しい。 【委員長】 ▼ある一定の介護という部分では特化している。コレクティブハウスについては、普通の人も入居可能。 【事務局】 ▼公助の前に、自助共助の世界である。 【委員長】 ▼公助は必要な部分は必要だが、やはり共助という部分のボリュームを増やしていかないと、財政的にキツクなるのは目に見えている。共助という状況をつくろうとすると行政だけでは作れないので、市民、市民団体、企業等の参画（協力）が必要となる状態である。 【委員】 ▼３・３地区にそういったものができると、高齢者だけでは商店街も偏ってしまい、すごくバランスの悪い商店街となり面白くない。 【事務局】 ▼高齢者に偏っているのも味があるのではないか。高齢者といえばベルロードというように。

	【委員長】 ▼そういうのを考慮し、３・３地区に何を立地させるのかというところ考えなければいけない。 ▼ここまでで見えてきたストーリーをベースに３・３地区とはどういうふうにあるべきかという部分をもう少し深堀していく展開もあるかもしれない。 **【事務局】** ▼共存共栄に影響があるということは当たり前の話か？ **【委員】** ▼今の商店街では厳しい。こちらの意識の問題。 ▼郊外の大型店の影響を受けたと思っているので、それが近所にできたらもっと厳しい状況になると思っている。 **【委員長】** ▼昔ながらの市場形式だが、もう少し拡大しようと量販品も売るようにし、だけど、生鮮の魚、肉、野菜は、既存店舗が入る形で膨らんでいったところは、地元との共存共栄ができている。当然限度はあるが、そういうふうにならないと共存共栄の話には至らない。 ▼全然違う文化を持ってきて自分の商売をはじめて、そういう人達と一緒に関係を取るかといえば取らない。 **【委員】** ▼大型店に拒否反応を持っている商店主が多い。また、組合費も街路灯費も払わないというのが常態化し、仲間と思えなくなっている。 **【事務局】** ▼話題がズレてしまうかもしれないが、空き店舗がなぜ発生し、指標を達成できないか考えた場合、人口の減少、遊歩客相が望めない状況（必要最小限の日用品の買い回り）、余剰床（需要と供給のバランスが崩れて供給過多）が上げられる。 ▼それからいくと、中心部の機能は居住、公共、サービス、商機能などであり、それら機能でもう一度焼き直すとしても、すでに必要とされていないので、次の出店に結び付かないだろう。 ▼また、商業床の持ち主が非常に高い家賃設定のため、借り手が出てこないという現象があるかもしれないが、現状からいうと、高い状況であるものの、段々下落しており、それでも出店する人がいないところからすると、やはり郊外店に頼る部分と共存共栄したときに、余剰床は違う機能に焼き直す必要がある。 ▼では、その機能としてどんな機能が求められているのか当然見出さなければいけない。そこで我々行政では、不動産を動かし、街を動かす起爆剤として支援策を発想し、３・３地区のイメージなども描いてきた経過がある。しかし、それにより衰退を招くとの発想には至らなかった。 **【委員長】** ▼それでは物の動かしだけを手法として行っているのであって、その先どんなルーチンになっていくのかイメージを持たずに進めようとしている部分に危険性がある。 ▼３・３地区や空き店舗に持ってきてもいい機能が、既存の商店を活性化できるような効果を持つものというふうに置かないと、商店街に影響を及ぼしかねない。そうすると最終的に何をしようとしていたのか、経済で中心市街地の活性化と言っていたのは何だったのかという話になりかねない。そのためかなりの吟味が必要。今後、認識のズレを早くカバーした方がいいかもしれない。

	【委員長】 ▼総合的な政策にならざるをえない。都市再生整備計画で実施した事業はいろいろあるが、これらは同じ目標に向かってやろうとしていた事業とのアピールが弱い。そういうロジックが作られていない。先ほどの話のように、ミックス型の住宅の整備がなぜ必要なのかという話。もともとあった市街地にはどんな機能があったのかということから出発し、それを認識していなければ、中心市街地としての意味はないだろう。そうでなければ、問題点をただ寄せ集めにしてメニューをつくったということにしか繋がらない。それでは不味い。 【事務局】 ▼前回、成功事例が何かあればというお話であったが、ケースバイケースなので適切な事例がなく、各種事例が滝川市に共通しないところがある。 【委員】 ▼共通となると街の特徴により難しいと思うが、それでも地方都市で成功しているところはあると思う。それはなぜ成功しているのかヒントを学ぶことができると思う。 【委員長】 ▼丸亀商店街のSPCづくりは全国的に非常に有名な事例だが・・・。 【事務局】 ▼「かんばる商店街77選」など国では成功事例を示しているが、それは一時の場面を切り取っているだけで日は成功していない（例えば、イベントで賑わいが形成されたかのような成功事例があるが、それは月に１度のイベント時であって、その日以外は、車の抜け道でお客はほとんどいないとの現状がある。）ので騙されてはいけないとの見解もある。 【委員】 ▼本当に成功している事例が必要 【委員長】 ▼本当に成功したかどうかを何で判断するかといった問題にもなる。 【事務局】 ▼丸亀も50年の定期借家をはじめ、億単位のお金を借入れ、今は成功しているといえるが、50年後先までは見据えておらず、今後慣れて廃れた場合どうなるのか。実際、駅前ビルも整備された当初は、成功だったといえる。 【委員】 ▼３・３地区やアーケードも同じ。キーテナントがくしゃみしただけで打撃を受けた。１か所だけに頼ると、法律改正や市場の変化したときの影響は大きい。 【委員長】 ▼何かを導入して実施したところは、事情の変化によりダメになることを背負っている。しかし、そこで持っている資源を活用しているところは、元々持っているものを使っているので、長く続くことはある。

事　　例	
金沢東茶屋街	かつては置屋であったが、今はほとんどなくお店などにリニューアルされ、その外観も元々の建築の姿かたちは保全するよう金沢市が条例で定め、整備費用についても支援。さらに電線も地中化し、街路灯もあえて付けず、提灯的な灯りで雰囲気を出している。 ※外国では民間の建物に公共の物をくっつけることが可能（権利関係は存在するが、公共側の融通が取れる。）で、電信柱もなく、街路灯もない代わりにビルの壁に照明がついている。結果、街はキレイになり双方にとってWin-Winの関係ができている。金沢もそれを真似ている。 ※アーケードの場合、商店街が一致団結して費用を捻出する必要があり負担が大きいが、この場合、民間の負担はない。
高山の旧市街	旧市街では、昔から個店個店が店先に七夕飾りをしており、仙台の七夕祭りのように行っている訳ではなく、普通のまちづくりとして行っている。このように費用をかけず、簡単に行うのであれば長続きし、効果を生む。イメージとしては、のぼり旗を立てるような感じ。ただし、のぼり旗だと自分のコマーシャルになるが、ここでは自分のコマーシャルをしてはいけない。みんなのコマーシャルという位置付けでやっている。 ※イベント化するとコマーシャルになってしまうので、普通にやってほしい。本当はランターンがそうなってほしい。
小樽雪あかりの路	もともと運河が寂しいとのつぶやきからはじまり、地元の青年部のような人たちが、ガラスの浮き玉にローソクを入れたらキレイとの発想で、さらにスノーランターンを市民ボランティアにより設置することで、圧倒的な迫力がある。力みがない。ある種郷土愛がある。

▼新しいイベントの難しいところは、自分のものだと思わないと続かなくなる。自分のものだと思わせる仕掛けをつくらないといけない。
▼以前京都の人に大文字焼きは祭りではなく送り火であると怒られた。その時期各家庭で、灯篭や提灯を飾るが、その姿がきれい。ああいう伝統風景的なものが全国的になくなってきているので、高山の旧市街に人が集まる。どこでも七夕をやっているのであれば、あえて高山に行かない。
▼そういったものとランターンがうまくコラボレーションできれば、市民側から積極的に参加するだろう。
▼できればちょっと視点を変え、もう一回こういった議論ができて、今日の成果を次回ご報告していただきながら、もう一つくらいの視点を出すということが次回できれば。
▼ハードの資源とは何かというのが話のテーマだったが、ソフトの資源とは何かというのもあるか。それは人だったり、文化だったり、七夕の話だったり、そういう滝川が持つ見えない非物的な資源というものについて、次回議論できないかというアイデアはある。

	▼日常が大事という話だとか、こちら側から何ということが出てくれば、仕掛ける方向みたいなものが少し見えてくるかもしれない。場所としては３・３やスマイルも視野に入れる必要がある。 ▼駅前は区画整備事業を行いながら、公共的な整備というものを考えつつ、再開発ビルがつくられた経緯があるが、やはり商業ビルとしての捉え方一辺倒になってないか。商業床の面積が比率的に大きいが、たきかわホールや子育て支援などが入っている訳で、もともとは公共的なことも狙いながらの整備だったのではないかなという感じがする。 **【事務局】** ▼陽だまり広場など、建物としてはある意味無駄なスペースもたくさんあることからすれば、行政が深く関与していたといえる。 ▼問題の３・３は微妙なところで、民間開発で・・・。 **【委員長】** ▼商業誘導はいいが、商業の内容は何かということが大事。見極めが必要。 **【事務局】** ▼稚内のように、映画館といった娯楽的なものが一つあってもいいのではないかという話もある。 **【委員長】** ▼映画館としてはビル会社が所有し、それを映画館の運営会社に低賃料で貸出し経営している状態なので、苦労も多い。 **【事務局】** ▼たきかわホールの場合、業界の関わりから、フィルムの供給がなかなかうまくいかないと聞いている。 **【委員長】** ▼映画とは何を見せるかによって違っていて、フィルム供給と言われたが、いわゆる普通の映画館で上映されるようなフィルムを配給会社は、たきかわホールに供給してくれないと思う。だけど、札幌でいうとシアターキノとか、駅前にあるとても小さな映画館、蠍座というのがあるが、これは本当にただのビルの中にあり、２、30席位しかないという映画館。そこで上映されるのは相当レアな映画でマニアが多い。 ▼もともとシアターキノがあった場所から少しズレた街区で再開発の話が持ち上がったとき、キノを誘致し、１・２階を店舗、３階以降を住宅とし、その２階にキノが入っている。以前より充実したシアターとして、経営も順調である。 ▼やはり特化したものはいける。滝川市の規模であればそういうパターンの方がよいと思うし、駅前の立地上、他からの呼び込みも可能なので活かせると思う。 **３　調整事項** **４　閉　　会**
会議資料	会議次第 資料１　中心市街地活性化における課題と方向性について 資料２　市街図等（Ｓ25年、Ｓ33年、Ｈ８年、H20年）